

対談「コミュニティのなかにある劇場とデザイン」
デザイナー 佐藤卓×長塚圭史

KAAT神奈川芸術劇場 長塚圭史の現在地と未来
創作と地域を結んだ「孤高の舞踏家」 大野一雄

〈REVIEW〉田中伸子、南部広美

〈神奈川へ、会いに〉ライフデザインラボ 船本由佳

KAATな人の行きつけ／公演スケジュール

KAAT PAPER

25秋 Beyond Theatre
神奈川芸術劇場
特集 人と場所



佐藤卓 × 長塚圭史

「コミュニティのなかにある劇場とデザイン」

KAATの力強いロゴは、2010年、グラフィックデザイナーの佐藤卓さんによって生みだされました。15周年を迎える今年、あらためて佐藤さんをお招きし、当時のことをふりかえりながら、これからの劇場とデザインのあり方について語り合いました。

文＝大芦実穂 写真＝コムラマイ



とされて、触れてはいけないものになっていく。遊びごころをどう受け継いでいくかというのは結構重要ですね。

デザインは、間を適切につなぐ仕事

長塚 デザインをする時に心がけていることはなんですか？

佐藤 まずは相手の話をよく聞くことです。依頼者の組織はどんな歴史やポテンシャルがあるのか、社会からはどのような印象をもたれているのか、そういうことをまずはお聞きする。それからなぜ私に声をかけてくれたのか、これも気になるので聞きます(笑)。そのうえで自分に何ができるのか、状況を把握することがとても大事だと思っています。

長塚 話を聞くことですか。

佐藤 デザインって、「間をつなぐ仕事」だと思っています。そのためには、つなぐ対象をできるだけ深く理解しないとよくつなげられません。では理解するために何が必要かということ、やはり対話なんです。対話を深めていくと、そもそもロゴって要るのか？ マークがある必要があるのか？ という話にまでなったりします。

長塚 KAATのロゴの時は、いくつか案を提示されたのですか？

佐藤 そうですね。基本的にはいくつか案を持って行って、一番良いものを選んでいただくという流れです。「これでいきましょう！」と強気で1案を出せるような性格じゃないんです。自信がないんだと思うんですね。でも、長くやっていると、自信がない状態がじつは良いんじゃないかと思ってきているんですけど。

長塚 自信がない状態がいい、と。

佐藤 ええ。デザインしてもつながらない場合だってあるわけです。その場合は修正したり、さらにつなぐ方法を考えるわけですが。だから常に不安だし、疑っているし。でも逆に疑っていないといけないなとも思っていて。その状態が、いい意味で自信がないともいえるのではないかと。

アートは自発的、デザインは他発的なもの

佐藤 演出家として、作品づくりにどのように向き合ってきましたか？

長塚 若い頃は、「これが答えだ！」というような言い方をしていたと思います。強く出ないと周りがついてこないようなこともありました。でも今は自分の演出だけが際立つ舞台は嫌で、それよりも俳優が立って、セリフが立って、すべてが響き合って結果的に全体が輝く方がいい。

佐藤 なるほど。

長塚 脚本を読んだ時に、「僕はこう解釈したから、こうやります！」と言い切ることの恥ずかしさと照れ臭さと、でもそれを厳然とやらなきゃいけない狭間のなかで、どう作品をつくっていくべきなのか、最近よく考えています。

佐藤 リーダーとして引っ張っていかないといけない部分もありますしね。



遊びごころも含めて継承していく

長塚 KAATのロゴをつくっていただいてから15年が経ちました。その際に「KAAT」という名称も考えていただいて。神奈川芸術劇場という名前だけだったら、正直ここまでやってるのは難しかったんじゃないかなと思っているんです。

佐藤 ありがとうございます。初代芸術監督の宮本亜門さんの時代にご依頼いただいて。ニューヨークのMoMA(ニューヨーク近代美術館)など、愛称をもって親しまれている美術館の例があったので、神奈川芸術劇場も頭文字を取って見たらどうだろうかと。すると「KAT」になってしまったんですね。

長塚 KATはあまりしっくりきません。

佐藤 そうですね。そんな時、金沢21世紀美術館の立ち上げと一緒にした、妹島和世さんと西沢立衛さんの建築家ユニット名が「SANAA(サナア)」だということを思い出して、同じ音が二つ続くのって面白いなと。それでAを一つ足して「KAAT」にしたら、これは良さそうだということになりました。

長塚 ロゴは一見シンプルですが、神奈川芸術劇場らしい重厚感も感じます。制作にあたってどんなことを考えていましたか？

佐藤 ロゴは顔と同じなので、記憶に残るような力強さが欲しいと考えていました。そこで文字はギリギリまで太くして。情熱のなかにも優しさや親しみやすい印象を与えたかったので、色は赤よりもマイルドなオレンジにしました。ロゴの制作にあたり、当時まだ建築中だったKAATに見学にも来させてもらって、イメージを膨らませていきましたね。

長塚 今もロビーにロゴの旗を飾らせてもらっています。オレンジのロゴと、もう一つ白いロゴもつくっていただきましたよね。

佐藤 そうですね。メインのロゴだけでなく、輪郭を縁取った袋文字というスタイルのロゴもつくってみました。どこか容れ物のようにも見えて、これからこのなかにいろんなものが入ることでKAATが育っていくというね。半分遊びで、そんな余計なものまでつくったんですが(笑)。でもすごく皆さんよろこんでくださって、15年経ってもこうして活用いただいてうれしいですね。

長塚 僕が初めてKAATの芸術監督に就任した時、ロゴのインパクトがあまりにも強いから、せっかくならこのロゴで遊びたいって言ったんですよ。したらダメだと(笑)。

佐藤 いやいや。ぜひいろいろ挑戦してみしてほしいです。「K」も「A」も「T」も

すべて直線から成っていて、「C」や「O」のように曲線がないため、シャープな印象があります。KAATの強固な雰囲気は宿命だと考えつつも、あえて壊してみるのはいいかもしれません。

長塚 今のロゴの骨格は保ちつつ、自由に動かしたりしてみたいです。

佐藤 ロゴなどの場合、最初にある程度ルールを決めるのですが、それが時間とともに法律のようになってしまふことがあります。元々は遊びごころがあったのに、いつの間にかその部分が削ぎ落



長塚 演出家としてはビッグアイディアがあっても、これに邪魔されて俳優の魅力が伝わらないんじゃないかとか。

佐藤 でも毎回それを考えるのも面白いですね。

長塚 芸術監督の仕事は劇場をどうデザインしていくかみたいなことに近いような気がするんですよね。自分の思う骨格に向かってどういうふうに進めていくのがいいのか、改めて考える機会が増えましたね。答えはなかなか出ないんですけれど。

佐藤 うん。やっぱりアートとデザインって、根本的な中心がちっと違うと思っていて。今年から学長を務めさせていただいている京都芸術大学の学生にも最初に話したことなんです。アートって自発的なもので、メッセージを送りだすことが大切。一方のデザインは間をつなぐことなので、自発というよりは他発だと思っています。アートが「やりたいこと」だとしたら、デザインは「やるべきこと」。私も曲がりなりにも美術大学を出ているので、アートができることへの羨ましさがあります。

長塚 アートをやられていたんですね。

佐藤 学生の頃は絵を描いたり、立体をつくったり、もがいていました。ある時、もがききったうえで、「自分はそっちじゃない」とデザインの方に来たんですけれど。だから、自分のなかには常に長塚さんが迷っているような世界への羨ましさがあるんです。

長塚 それでいうと、自分がやりたいことをやるよりも、この劇場がやるべき



ことを探してやりたいという気持ちがあるんですよね。自分の作品をKAATで上演する時も、基本的には劇場にとっての必然のようなものをしっかり探し当ててから、そこから自由に創作していくという流れです。

佐藤 長塚さんのやられていることは、デザインとアートの両方をまたぐことですよね。芸術監督はデザインの側面があって、演出家にはアートの側面があるから、そのバランスが難しいのかもしれないね。

芸術監督は全体を見て調整していく仕事で、演出家は自分らしさみたいなものを出す仕事のように思います。

“魅力的なわからなさ”をどう醸成するか

長塚 劇場という場所において、デザインはどのような役割を果たすと思われますか？

佐藤 劇場のすべてがデザインといっても過言じゃないと思います。照明、空間、温度。意識にのぼるデザインなんてほんのわずかですよね。ほとんどが無意識のなかに溶け込んでいくわけで。でも誰かがそれを考えなくちゃいけない。デザインってありとあらゆるところにあるので、どれがデザインって言い難いくらい広いものだと思いますね。ルールもデザインの一つですから。

長塚 ルールもデザインですか。

佐藤 そうです。例えば、街はデザインだらけです。信号機はプロダクトデザインですが、右側通行や左側通行というルールもデザインされたもの。施設の動線やルールを変えるだけでもその場の雰囲気は変わってきますから。

長塚 人を惹きつける劇場のデザインについてはどのようにお考えですか？

佐藤 KAATを例にするなら、ここでしか観られない面白い舞台があるから来たいとか、長塚さんがやっているからすべてチェックしたいとか、理由はさまざまあると思います。一方で、人が興味をもつのは、「魅力的なわからなさ」に対してだと思うんですね。「何これ？」って思っている時って、魅力的に思っているんだけど、何だかわからないわけですよ。人に対してもそうですね。「何なんだ、この人は」と、わからないから惹きつけられて好きになっちゃったりする。

長塚 ええ。わかります。

佐藤 「魅力的なわからなさ」をどうつくれるかというのは、これだけ情報量の多い社会のなかで、大切なことのような気がするんですよね。でも今の世の中はなるべくわかりやすくしようとするじゃないですか。するとつまらなくなっていくんですよね。

長塚 そのとおりだと思います。

KAATでも、例えば外壁にはポスターを貼るようなただわかりやすい告知だけでなく、もうちょっと人間の感性を刺激したり、「ここは何だろうな」と思わせるための取り組みをしてきました。

佐藤 良いですね。演劇なんかは「魅力的なわからなさ」の最たるものだと思います。観劇していると、これは何だろうと思っているうちにどんどん話が進んでいきますよね。

長塚 舞台は完璧ということはないですからね。お客さまの想像力に委ねられるところが多々あります。

佐藤 言葉にしても空間にしても、演劇には無限の可能性を感じますよね。



佐藤卓 Taku Satoh

グラフィックデザイナー。1979年東京藝術大学デザイン科卒業、1981年同大学院修了。株式会社電通を経て、1984年佐藤卓デザイン事務所(現 株式会社TSDO)設立。代表作に「ロッテ キシリトールガム」「明治おいしい牛乳」パッケージデザイン、「PLEATS PLEASE ISSEY MIYAKE」グラフィックデザイン、「金沢21世紀美術館」「国立科学博物館」シンボルマークなど。

佐藤卓さんの代表的なお仕事例

画像提供:TSDO



ロッテ キシリトールガム (1997～)



明治おいしい牛乳 (2001～)



金沢21世紀美術館 (2004)



デザインあ展neo (2025)

KAAT 神奈川芸術劇場 長塚圭史の 現在地と未来

2021年4月、KAAT神奈川芸術劇場の芸術監督に就任した長塚圭史。
5年間の任期は今年で一区切りとなるが、
2026年4月から2031年3月までの続投もすでに決まっている。
コロナ禍を乗り越え、「街へひらいていく」という力を糧に、
これからのKAAT、そして芸術監督であることについて
— ある日の午後、長塚圭史に投げかけた。

そして、とうとうと語ったその記録である。

劇場のために必要なことは何か？

芸術監督に就任してからは、この劇場にとって刺激になることは何か、劇場が周辺地域に何を
もたらすことができるのかをずっと考えてきました。ここは、芸術監督である私が好きなことをす
るような場所ではない、それよりも「劇場にとって必要なことは何か？」を考えました。KAATで
は、私が手がける作品も上演していますが、それはシーズンのテーマに沿った起爆剤のような
作品であったり、観客の皆さんが、我々が毎年掲げているシーズンタイトルについて考えるきっ
かけになるような作品をつくってきたつもりです。もちろん好みはハッキリとありますし、創作
に入れば違いはありません。ただきっかけはいつも劇場の現在のことを考えて選んできました。
劇場広報のアートディレクションにデザイナーの吉岡秀典さんをお招きしたのも、芸術監督就
任と同時にKAATに新しい印象をもたらしてくれると考えたから。広報誌のあり方を考えて、地域
とつながる『KAAT PAPER』をつくったことも、劇場のひろがりを目指して。芸術監督の仕事とは、
劇場にとって一番いい方法を探すことだと認識しています。ただ、それをきちんと言語化できたの
は、再任が決まって次の5年間を考えるタイミングでした。今回の『KAAT PAPER』で佐藤卓さん
と対談をした時に、芸術監督の仕事はじつはデザイナーに近いのだと感じました。トータル
で10年務める以上は、新しい引き出しも見つけだしていかなきゃいけない。新しい才能の発掘
は、「カイハツ」というプロジェクトで展開して、やっと動きだしたところですが、残りの任期で
も、もっともっと新しい人たちに会ってみたいです。

劇場らしくない広報誌『KAAT PAPER』の5年間

劇場の広報誌として、この『KAAT PAPER』をスタートして5年経ちます。劇場のことだけではなく、さまざまなト
ピックを取り上げるといふ、公共劇場の広報誌としては珍しい形態ですが、毎号の対談ページや、地域の皆さんに会
いに行く「神奈川へ、会いに」のコーナーなどを通して、たくさんのつながりが生まれました。「神奈川へ、会いに」の
第1回でお会いした、横浜中華街発展会協同組合前理事長の高橋さんとの出会いによって、アトリウムでのランタ
ンオブジェを展示することができました。このランタンは、春節の劇場を華やいてくれたものでした。元町エスエス会の
宝田博士理事長との出会いは、『花と龍』(2025年2月)で元町のお店の屋台出店につながりました。TSUBAKI食堂の椿
直樹さんにお会いしたことによって、アトリウムでのマルシェを実現することができました。そうしたつながりをきちんと
積み上げてこられたのは、『KAAT PAPER』という場があったからです。
「劇場と人をつなぐこと」は、芸術監督として取り組みたいことのひとつでした。私が芸術監督に就任した当初、舞台
芸術に関心のある方々にとって「KAAT神奈川芸術劇場」は、すでによく知られていた劇場でしたが、神奈川県内の
認知はそれほど高くなく、この状況を改善することが課題の一つだと思いました。しかも、KAATは公官庁の立ち並
ぶ臨海都心部にあり、劇場が乱立している東京とはまた違うアプローチを考える必要がありました。そのための一つ
のアクションが、新しい広報誌『KAAT PAPER』でした。地域の皆さんや、劇場に足を運んでくださる方々、行ったこと
はないけれど面白そうだと興味をもってくださる方、いろんな人と劇場がつながるための一つのアクションとして
『KAAT PAPER』が果たした役割は大きかったのではないかと思います。
思い返してみても、いろんな方にお会いしました。篠山紀信さんは残念ながら亡くなってしまいましたが、金平茂紀さ
んはよく劇場にご来場くださっていますし、レビューもご執筆いただくなど長くお付き合いができています。お会いした皆
さんと、こういった関係を築くことができたことは、劇場にとっても大きな財産であると感じています。
また、毎号掲載している、レビューもとても気に入っています。舞台芸術の評論家だけでなく、ジャーナリストや文化人
など、バラエティ豊かな素晴らしい方々に、独自の視点で作品をご覧いただき、ご執筆いただいているのですが、これは
劇場の広報としても、我々の発信力になっていると思います。この5年間の総括として過去の作品をふりかえる時に、各界
の多彩な方々の言葉がともに添えられていることは、単なる公演の記録にとどまりません。我々の劇場運営に新たな視座
を与えてくれるものだと感じています。
現在も広報誌のあり方を模索しながらつくっていますが、「劇場になじみのない人も手に取りたくなるものにする」という当
初の目的がどうすれば達成されるのか考え続けなければなりません。一方で、フレキシブルなスタイルだからこそ、続けてこ
られたという側面もあるんじゃないかと思っています。こういった形式の広報誌は、公共の劇場としてはとてもチャレンジ
ングなものですし、続けてきた意味はあると思っています。

コロナ禍から始まった芸術監督としての5年間。

KAAT神奈川芸術劇場の芸術監督として就任して、今年5年目となります。当初、
任期は5年の予定でしたが、2023年に再任が決まり、2026年度からの5年間も、芸
術監督を務めることになりました。今は折り返し地点ですが、この5年間のことをふり
かえろうと思います。
まず、「劇場」の仕事は、作品をつくりだし、発表して、お客さまに観に来ていただく
ことが基本です。いつでも仕事は山ほどあるのに、劇場スタッフの人員はギリギリで
す。KAATだけでなく、あらゆる劇場でスタッフの過重労働が問題になっているなか
で、外部から入ってきた私が、「変化」を提案することは並々ならぬことでした。アトリ
ウムの新しい活用方法を考えたり、新たな公演の形態に挑戦してみたり、言葉では簡
単なのですが、そんなことをやりはじめたら、仕事のフローが変わり作業が増え、大変
なことばかり。就任当初の1、2年は、スタッフとの話し合いにかなり時間を割きました。
就任がちょうどコロナ禍に重なってしまい、劇場の運営もイレギュラーな状態のなか、変
化を起こそうとするのは、想像以上に大変なものでした。この5年でわかったのは、理解
してもらうことの重要性です。
現在のKAATは、私が就任する前に比べると主催公演の数が減りました。適正な働き
方を考えていくなかでそれは必然なのですが、その一方で、芸術家たちが作品を創作す
る機会が失われてしまうことも危惧しています。こういった状況のなかでできる最善のこ
とは何だろうか、と模索してきた5年間でもありました。
難しい問題ではあるけれど、ある程度の道筋は見えてきたと思っています。一つは
シーズン制を掲げたことで、年間のリズムが生まれました。メインシーズンのコンセプ
トを決めたら、プレシーズンはどうな考え方で行うのか、夏のキッズ・プログラムは
どうするのか、広報の方針はどうしていくのか。この5年で、少しずつではありますが
劇場もこのリズムがつかめてきているのではないかと思います。

これからの5年は？

2026年度からの5年間も、方針が大きく変わることはありません。劇場を多く
の方に知っていただきたいし、クオリティの高い作品を上演したい。この5年で
培ってきた国際共同制作や、企画開発や人材育成の「カイハツ」なども継続して進
めながら、さらに劇場としてやるべきこと、あるべき姿を考え続けなくてはいいな
と思っています。
そして、2026年度からの5年間の後半は、次の芸術監督にバトンタッチしてい
く期間になっていきます。次の芸術監督は、私よりもっと大きな変化を提案するか
もしれません。だとすると、私の任期で何か大きな「アクション」を起こして、劇場
の皆さんが肩慣らししておくのがいいのか、それとも現状をさらに洗練させてい
く方法をとるべきなのか。
芸術監督というのは非常に面白い仕事である一方で、すでに活動してい
る組織に入る大変さを身をもって感じました。ゼロから自分の考えを劇場
と照らし合わせ、対話していかなければならない。次の芸術監督がうまく
仕事が始められるような体制をつくることも、提案していきたいです
ね。

『KAAT PAPER』は「再会する場」にも

これからの『KAAT PAPER』を考えるうえで、まず取り組みたいのが、
これまで紙面を通して訪ねた場所、対話した方々との「再会」です。「神
奈川へ、会いに」で出会った商店会の皆さんをはじめ、『横浜ウォー
カー(現・東京ウォーカー)』の鷹取祐子さん、資生堂の中西裕子さん、
横浜美術館の館長・蔵屋美香さんなど、これまでにご縁をいただ
いた方々と、KAATマルシェや『花と龍』のように、今後何か一緒にでき
る機会をつくれたらと考えています。
また、「カナガワ・ツアー・プロジェクト」でも、神奈川県内のいろん
な劇場をめぐるしてきましたが、一度きりで終わる関係ではなく、劇場
同士の継続的なつながりを築いていけるようにしたい。その意味で
も『KAAT PAPER』を再会のツールとしても機能させていきたいと考
えています。『KAAT PAPER』は演劇に限らず、さまざまなテーマを
発信できる自由な広報誌でありたいのですが、それと同時に
「KAAT 神奈川芸術劇場」という明確なアイデンティティーは、しっ
かりと保ち続けたい。劇場の人間が考え、つくっているということ
が伝わるようなスタイルを模索しながら、多くの人に届くように「デ
ザイン」していきたいと思っています。
今、考えているのは、劇場にはあまり足を運ばないけれど、文化
や文章を読むことが好きな方、価値観や趣味の近い人たちにどう
やってこの『KAAT PAPER』を届けるかということです。公演チラシ
の折り込みとは異なる手法でアプローチすることで、『KAAT
PAPER』がきっかけとなり、「ちょっと劇場に行ってみようかな」と
思っていたような導線をつくっていきたくと思っています。

演劇人として考えたこと。芸術監督として実践できたこと。

芸術監督は、本当に面白い経験です。興味深いことに、芸術監督就任以前から始めていた演劇ユニット(『新ロイヤル大衆舎』)や長年続けてきた劇団(『阿佐ヶ谷スパイダース』)で考えていたことと芸術監督の仕事が、ちょうどキャッチボールをするような関係になっているんですね。

2021年にKAATで上演した『王将』-三部作-は、2017年に新ロイヤル大衆舎が商業演劇のルールをまったく無視して、下北沢の劇場「楽園」で上演したのが初演でした。小部屋のような楽屋が一つある小さな小さな劇場だったので、準備をしている俳優が劇場の外まであふれてしまうんです。俳優は、終演後にスタッフに守られながら楽屋口から出てくるような“スター然”とした存在である必要はありません。それでは、観客との間に境界線が生まれてしまう。『王将』では、つくり手と観る側、街の人が同じところに立っている。そんなことを考えはじめた頃でした。これは、KAATから声をかけていただく少し前の話です。

また、小劇団の成長ステップとして「まずは本多劇場を目指す」といった“すころく”的なルートがありましたが、そこから少し離れて、劇団では「1万人動員を目指す」といった目標よりも、もっと生活に近い演劇のあり方を模索しています。もちろん、多くの人に観てほしいですし、経済的な面でも成立させなければなりません。そのバランスを探る時期に入っていました。劇団には演劇分野で働いてきた人じゃない人たちがいっぱいいますから、そういう人たちと一緒に築いていく。子どもがいる人も演劇と一緒につくった方がいいんじゃないか。そんなことも、考えはじめていたんです。

劇団の公演では、毎回バックステージツアーを開催していて、公演後に、俳優や舞台監督と一緒に舞台装置や劇場のことを説明しています。これをやるとお客さまとの距離がすごく近くなります。舞台裏の構造や劇場の背景に触れることで、劇場そのものに愛着をもってもらえるきっかけにもなります。街を歩いていても「あそこに面白い劇場があるんだよね」と思いたすかもしれない。KAATでも、定期的にバックステージツアーを開催していますが、とても人気がありますし、このツアーを経て劇場に興味をもってくくださる方も多いです。

先ほど触れた『花と龍』で屋台を出すというアイデアも、以前、劇団で『秋の下北沢盆踊り』というイベントをした経験がもとになっています。盆踊りを開催するには、ただ広場の使用許可をもらうだけじゃダメなんです。消防署への報告や諸手続き、地元の商店街との連携が必要でした。何とか開催にこぎつけ、下北沢ではコロナ禍以降の初めての盆踊りだったこともあり、大勢の方に来場してもらい、地域の方からも感謝されました。その経験があったからこそ「KAATも商店街と組めば屋台を出せるんじゃないか」という考えに行き着いたのです。そのやりとりを通して、公共劇場にはたくさんのルールがあるものなのですが、KAATは突破口を見出せるフレキシブルな劇場であることにもあらためて気づかされました。従来であれば避けていたことでも、「やれないことはないですよ」と言ってくれる人がいることがなんと心強いことか。

思えば、劇団のフットワークの軽さと、KAATのもつスケールの大きさ。その間を行き来するようなキャッチボールをしてきたように思います。

演劇界の「当たり前」に一石を投じたい。

ロンドンの劇場では、終演後に出演した俳優が、劇場併設のバーで観客と一緒に飲んでいることもあるんです。私たち演劇人は、決して高くて厚い壁の向こう側に閉じこもっているわけではなく、日々の暮らしのなかで営まれる“生活の一部としての演劇”を生業にしている存在です。その姿が、もっと自然に、もっと身近に見られるような環境があってほしい。

ロンドンの「リリック ハマースミス」のカフェでお茶をしていると、歌声とか、稽古の様子が聞こえてくるんです。扉を開けっぱなしで練習しているから、「ああ、近々公演があるんだな」とわかる。いいですね。

もちろん、すべての劇場がそんな環境になることは難しいでしょうけど、それぞれの劇場にできることがあるし、できないとあきらめてしまうのはもったいない。KAATのアトリウムはフリースペースになっていますが、平日のお昼時は周辺で働く方々が弁当を食べにきてくださいます。そのなかで、稽古中の俳優が弁当を食べている。そんな光景があってもいい。

そのためにも、稽古は午前中に始めて夕方には終わる、というのが理想です。お昼の休憩をしっかり1時間とることができれば、自然と街に出る機会が生まれるでしょう？ 短い休憩で、持参したおにぎりを慌ただしく食べて稽古に戻り、稽古が終わったらすぐに帰宅する。そんな繰り返しでは、劇場や街との関係を感じることはできません。稽古が17時頃に終われば、「ちょっと飲んで帰る？」とか、「下のカフェで1時間だけ話そうか」といった自然な交流が生まれます。劇場が主体となって、そこで働く人と街と響き合う時間をつくらないといけない。これはスタッフの勤務時間にも関わってきます。多くの公共劇場で踏襲されている働き方も、少し発想を変えてもいいかもしれません。これは簡単なことではありませんが、まだまだいろいろな試みができる余地はあると思います。以前から、演劇分野での働き方改革を進めるべきではないかと考えていました。KAATだけが直面している問題ではなく、日本の演劇界全体が向き合わなければならない、根本的な課題でもあるのです。

2025年メインシーズンタイトル「虹~RAINBOW~」とは？

2025年度のシーズンタイトル「虹~RAINBOW~」には、私がKAATで歩んできた5年間のすべてが込められていると言っていると思います。いわば、集大成。これまでの5年間、プログラムしたすべてが順調に実現したわけではありません。これまで実現できなかったことも、今年度によりやく盛り込むことができました。それを象徴する言葉として「虹~RAINBOW~」というシーズンタイトルが生まれました。

私たちは2021年度以降、日本語の豊かさや文字に込められたニュアンスを楽しみながら、イメージを広げていく“ことば遊び”を続けてきました。「冒(ぼう)」「忘(ぼう)」「貌(ぼう)」「某(ぼう)」。それぞれのシーズンタイトルは、KAATから提案する、社会の“見方”や“レンズ”を示すものでした。今年度の「虹~ RAINBOW ~」は、多様な表現、人種、文化、ルール、生き方、ジェンダー、そうしたあらゆる違いが共存することの可能性と難しさを内包しながら、それでもなおともに美しい弧を描こうとする意思を示しています。

「多様性」は、それぞれの違いを認め、尊重し合うことですが、しかし、その「違い」が時に対立を生み、断絶を引き起こします。今の私たちも、まさにそうした緊張のなかで生きています。「虹」は異なる色が並行しています。違う価値観が並走している時、隣り合う者どうしが常に調和しているとは限らず、時に不協和や混乱も生まれるでしょう。でも、その違いがあるからこそ、“虹”というかたちに希望を見出したい。色と色が時にその境界線で混じり合いながら、美しい光の弧を描いていく。

きれいごとと思われるかもしれませんが、しかし、希望の言葉を提示することも、舞台芸術の使命だと信じています。気づき、変化し、新しいものを受け入れ、他者に共感する力がある。AIは膨大な電力を消費しますが、人間の想像力は電力を使わずに世界を広げられる。舞台芸術はまさに、その人間の力によって成り立っているものであり、劇場は、その力を注ぎ込んだ「人間讃歌」の場所であると、思っています。しかし、だからこそ、そこには“暗さ”もあります。人間の内側にある影や不安を描きだし、時にはその暗がりを見つめることで、社会の新たな側面に気づき、日常のなかでも誰かの痛みに寄り添えるようになる。それが、劇場がもつ力だと思います。

互いの違いを認め、尊重し合う社会は、今確実に危機に瀕しています。「多様性」をきれいごとにしなないためには、一人ひとりの想像力が必要です。KAATでもさまざまな国やバックグラウンドをもつ芸術家と協働する機会がありますが、そのなかで一貫して感じるのは、芸術はあらゆる立場の人とともにあるべきだということ。それに迷いはありませんが、社会全体を見渡せば、時に自分とは異なる意見に出会い、戸惑うこともあります。だからといって、自分とは異なる考えを遠ざけ、排除してもいいのだろうか。常にそのことを考えながら生きていく時代に、私たちは足を踏み入れました。

もちろん、揺れることはあります。でも、自分に問いを投げかけ、他者と対話をしながら、自分のなかの信念を見つけていく。そのプロセスが、これからますます大事になると思います。劇場も個々人がそれを考える場所でありたい。私たちKAATも、大きな劇場を運営している影響力を自覚したうえで、どこまで想像力を広げられるかが強く問われているのだと思います。

創作と地域を結んだ

「孤高の舞踏家」大野一雄

世界的な舞踏家・大野一雄さん（1906-2010）と、その次男であり舞踏家・演出家の慶人さん（1938-2020）は、横浜市保土ヶ谷区上星川を拠点に創作活動を行い、地域社会とのつながりを大切にしていました。「孤高の舞踏家」と呼ばれ、前衛的な芸術活動を展開していたお二人は、どのように「街にひらいて」いたのでしょうか。大野慶人さんの妻・大野悦子さんと、NPO法人ダンスアーカイヴ構想理事長の溝端俊夫さんにお話を伺いました。

写真＝原田教正

学校の昼休みに踊る先生。それが稽古で、生徒が観客だった。

北海道に生まれ、秋田県で青春を過ごした大野一雄さんが、横浜に移り住んだのは、日本体育会体操学校（現・日本体育大学）を卒業後、横浜の関東学院に体操教師として就職したことがきっかけでした。その後、横浜の捜真女学校に同じく体操教師として赴任しましたが、1938年、次男・慶人さんの誕生と同年に軍隊に召集を受け、中国やニューギニアで過酷な9年間を過ごしました。

溝端 「捜真女学校では、体育の授業でダンスを教える必要がありました。それで、『石井漠舞踊研究所』でモダンダンスを学び、その後、『江口隆哉・宮操子舞踊研究所』に入所しました。終戦後は捜真女学校に復職しましたが、教師を続ける傍ら、1949年に『大野一雄舞踊研究所』（現・大野一雄舞踊研究所）を設立し、第一回の公演は東京・神田共立講堂で行いました。当時の公演は、学校の同僚や生徒、地域の方々も多く足を運び、大盛況だったそうです」

大野 「その頃は、チケットの売り上げの10%を入場税として課税する制度があったんです。公演は盛況でも、観客が増えるほど手元に残るお金は減っていく。芸術を続けていくことは、当時とはにかくお金がかかりました」

のちに稽古場を設ける以前は、授業の合間や休み時間に、校庭や体育館の片隅で稽古をしていました。

溝端 「昼休みには一人で踊って稽古をしていたのですが、先生や生徒たちがいつも見に来ていたそうです。当時の大野一雄は、自分の踊りをゼロから模索していた時期でした。その踊りを“観客”に見てもらうなかで、表現力を磨いていったのだと思います」

1950年代の終わりに、土方巽と出会い、彼の踊りはモダンダンスから舞踏へと発展していきました。1961年、自宅の隣に稽古と創作活動の拠点である「大野一雄舞踊研究所」を開設します。

大野 「このあたりは捜真の先生方が多く住んでいたので、その縁でこの場所を紹介していただきました。研究所の床板と窓枠には、捜真女学校の取り壊した建物の廃材をもらい受けて使用しています」

捜真女学校には、定年退職後も用務員として1980年まで勤務を続けました。「ペンキを塗ったり掃除をしたり、その作業の所作までもが美しかった」と当時の先生たちは語っていたそうです。

横浜に住み働き、創作を続ける。

地域とのつながりは、大野一雄舞踊研究所の近くの、上星川幼稚園にも見ることができます。1960年代から2006年まで、幼稚園のクリスマス礼拝に毎年サンタクロースとして参加していました。2001年以降、車椅子生活になってからも変わらず訪問を続け、2010年、大野一雄さんが亡くなってからは、長男の幸人さん、次男の慶人さんがサンタの役を引き継ぎました。

溝端 「大野一雄は、12月にはツアー公演の日程を入れませんでした。子どもたちの前でサンタクロースを演じることが、最も重要な“公演”だったのです。上星川幼稚園だけでなく、捜真女学校では、クリスマスページェント（聖劇）を指導していました。捜真バプテスト教会のクリスマス燭火礼拝でも、子どもたちとともにページェントに参加し、聖母マリア役として踊ることもありました」

1980年、ナンシー国際演劇祭での『ラ・アルヘンチーナ頌』がヨーロッパで高く評価され、それ以降、世界各国での公演が増えていきました。世界的な舞踏家になっても、地域の人に観てもらうことは続けていたといいます。

溝端 「海外からの招聘が増え、地元の人に公演を観ていただく機会が減ったことを残念に思っていたのでしょう。元々は地元で知られた芸術家だったわけですから。90年代以降は、横浜市泉区の『テアトルフォンテ』など、神奈川県内の劇場で公演を意識的に行うようになりました」

また、お金のかかる活動の資金を稼ぐために、大野慶人さんは中区山下町のシルクセンターでドラッグストアを営んでいたこともありました。店番をしていたのは悦子さん。当時はメリーさんや、横浜のキャバレーで公演していた土方巽さんも、お店を訪れたそうです。

大野 「横浜にはだいぶお世話になったので、地元へ何かお返しをしたいという意識をもっていたと思います。1993年には、横浜赤レンガ倉庫で、美術家の中川幸夫さんたちと『御殿、空を飛ぶ。』という公演を行いました。当時、荒廃していた赤レンガ倉庫を、横浜市が保存・活用する方針を検討していた頃のことです。市の協力のもと、2日間で3,000人が集まった大きな公演になりました」

世界的な舞踏家となっても、創作の中心は上星川の大野一雄舞踊研究所であり、海外から学びに来る人が、研究所の周辺に住み込んで稽古をするなど、つねに街とのつながりがありました。

溝端 「横浜で、働き、暮らし、創作したものを、街の人に見てもらう。ヒューマンコンタクトのなかでの芸術活動は、とても小さな営みかもしれませんが、実は普遍的な芸術のあり方だとも思うのです。私が関わっていたBankART1929※のプロジェクトでも『地域とは何か』を考え続けました。横浜の特に臨海都心部では、昼間にはぎわっていても、住んでいる人は限られます。地域とのつながりを築こうにも、意図的にアクションを起こさない限り、かなり難しいんですね。大野一雄、慶人の場合は、家族と一体になって地域と関わることができました。それは彼らにとっても生き甲斐だったと思います」

大野一雄舞踏研究所をどう遺していくか

大野一雄さんは2010年に、慶人さんは2020年にこの世を去りました。現在、溝端さんが理事長を務める、NPO法人ダンスアーカイヴ構想では、彼らの映像や資料をオンラインでアーカイヴ化する取り組みを進めています。

溝端 「今でも弟子たちが研究所で創作活動を行うことがありますが、かつてほどの頻度ではありません。ここには、衣装や小道具も残されており、この場所自体がアーカイヴとしても貴重な資産です。しかし、今後、この研究所をどう維持していくかは非常に難しい問題です。ボローニャ大学内にある大野一雄研究室にも資料が残されていますが、できれば、彼らが愛した神奈川の地で保管できるように方法を探っています」

大野一雄 Kazuo Ohno

1906年北海道函館生まれ。中学から高校までは母方の秋田の親戚に預けられる。旧制大館中学では、陸上部に所属、400メートルの秋田県記録を更新。1926年、日本体育会体操学校（現・日本体育大学）に入学。在学中、帝国劇場の三階席からラ・アルヘンチーナの公演を観劇。体操学校を卒業し、関東学院に体育教師として赴任。捜真女学校に転任。1933年に石井漠の門を叩き、1936年には江口隆哉、宮操子の研究所に入った。1938年に召集を受け、中国、ニューギニアで従軍。1949年に「大野一雄舞踊研究所」（現・大野一雄舞踊研究所）を設立。1950年代終盤に土方巽と出会い、1977年、大野一雄がソロで踊り、土方巽が演出した『ラ・アルヘンチーナ頌』が初演された。1980年に、フランスのナンシー国際演劇祭に招かれ、西欧の芸術家たちに衝撃を与え、1999年12月にニューヨークで行われた『20世紀への鎮魂』まで海外公演を続ける。2010年逝去。

大野慶人 Yoshito Ohno

1938年東京生まれ。1959年土方巽の『禁色』で少年役を演じる。60年代の暗黒舞踏派公演に参画。69年初リサイタル後に舞台活動を中断、85年『死海』で大野一雄と共に演、カムバックした。86年以降、大野一雄の全作品を演出。グッパタール舞踊団ダンサーとの共演『たしかな朝』（2010）、音楽家アントニーとの『Antony & the Ohnos』（2010）。ソロ作品『花と鳥』（2013）はヨーロッパ（2014）、ブラジル（2015）を巡演。著書に『大野一雄 魂の糧』（フィルムアート社）、『舞踏という生き方』（かんた）。2020年逝去。



舞踏 BUTO



1959年に土方巽が創作した舞踊作品『禁色』とその前後に発表した一連の作品に始まり、それらの美学や哲学、動きの特徴を受け継ぎながら今日までさまざまな形で発展を続けている身体表現。西洋の舞踊とは対照的に、舞踏は、病、老い、死といった問題に触れ、異なる価値観を示した。1970年代後半、土方の弟子達や大野一雄が欧州で活動を始めたことから、舞踏はBUTOとして世界各地に広がった。



溝端俊夫 Toshio Mizohata

NPO法人ダンスアーカイヴ構想理事長。1983年大野一雄舞踏研究所入所。以来、大野一雄、慶人の国内外の活動に制作、照明デザインなどで携わる。90年代から大野一雄さんのアーカイヴ資料を整理し、『大野一雄稽古の言葉』をはじめ、書籍、DVDを多数編集。2004年よりBankART1929の設立に参画し、「大野一雄フェスティバル」を制作。

大野悦子 Etsuko Ohno

1938年横浜に生まれる。文化学院美術科卒業。中学生の時に大野慶人と出会い、1962年結婚。1969年、大野慶人の初ソロリサイタル『Dance EXPERIENCEの会』から、大野慶人の衣装を担当する。1977年大野一雄舞踏公演『ラ・アルヘンチーナ頌』以降は、大野一雄の衣装デザインと、着付け、メイクを担当した。

※BankART1929 … かつての横浜市の創造都市政策の下で始まり、歴史的建造物を活用したオルタナティブスペースの運営を展開してきたNPO法人。2004年に馬車道の旧第一銀行・旧富士銀行の活用を開始、2005年に旧日本郵船倉庫に移転・改修し、BankART Studio NYKを開設。「BankART Life」や「大野一雄フェスティバル」をはじめとするプログラムを次々と開催し、横浜を代表するアートスペースとして内外に認知される。2018年のBankART Studio NYKの閉鎖後は、新高島のBankART Stationや馬車道のBankART KAICOなどで活動を継続するが、2025年の横浜市との契約満了に伴い、現在は拠点を定めずに活動を継続している。

REVIEW



ミュージカル

『LAZARUS』

2025年5月31日(土) — 6月14日(土)
KAAT神奈川芸術劇場〈ホール〉

ボウイの音楽が綴る まだ見ぬ世界への祈り

文=田中伸子(演劇ライター)

音楽・脚本：デヴィッド・ボウイ
脚本：エンダ・ウォルシュ
演出：白井晃
翻訳：小宮山智津子
音楽監督：益田トッシュ
出演：松岡充、
豊原江理佳、鈴木瑛美子、小南満佑子、
崎山つばさ、遠山裕介、
柳沢明璃咲、渡来美友、小形さくら、
渡部豪太、上原理生
ダンサー：Nami Monroe、ANRI、KANNA



撮影=田中亜紀

坂東玉三郎が故デヴィッド・ボウイとの思い出を語っていた。それによると、1973年ボウイが初来日した際に玉三郎が出演する歌舞伎を鑑賞。その舞台に大いに感銘を受けたボウイは玉三郎が化粧するところを見学させてくれと頼んだという。傍で黙って見ていた彼は帰国後、歌舞伎の化粧を取り入れ、白い肌に目のまわりを強い赤の頬紅で囲んだ独自メイクで“何者か”となり、新しい価値を観客に問いかけた。彼が時代の先陣を切り追いかけた先には何があったのか、ボウイが考えた地球規模の世界のあり方とは。神奈川芸術劇場ホールで上演されたミュージカル『LAZARUS』は宣伝文句にあるように天に召された“デヴィッド・ボウイ最後の贈り物！”だった。

俳優としても輝かしいキャリアをもつボウイの主演映画『地球に落ちて来た男』(1976)の異星人トーマス・ニュートンのその後をアイルランド人劇作家エンダ・ウォルシュが執筆、そのウォルシュ作品を演出してきた白井晃が演出した今作。英国で上演された際(2016年)には、その評価がま二つに分かれた。5つ星をつけるレビューがある一方で、星は1つ「ナンセンス」と切り捨てる新聞評も。

この賛否両論はここ日本でも同じような反応なのかもしれない。しかし、そんな賛否を聞きながらボウイは天国でもっと喧々譁々すればいい、それこそが狙い、とほくそ笑んでいるのではないだろうか。

故人の意向により英語での歌唱が条件の舞台だったが、豊原江理佳をはじめ、英語での歌唱をものとししないキャストにより日本語での演技と字幕付きの英語歌唱という理想的な形式を実現。主演俳優、松岡充がロックミュージシャンであるというアドバンテージも加点となり、真に忘れ難いステージとなった。

田中伸子 Nobuko Tanaka

The Japan Timesの演劇・ダンスライター職を経て、バイリンガル演劇サイトjstages.comを運営中。ロンドン、コロネット劇場の日本担当を務める。舞台評ブログ「芝居漬け」を(ほぼ)毎日更新中。

KAAT×TJP(ストラスブール・グランテスト国立演劇センター) 『ダンスマラソンエクスプレス(横浜⇄花巻)』

2025年7月10日(木) — 7月13日(日)
KAAT神奈川芸術劇場〈大スタジオ〉

レールは 農民芸術概論綱要へと つながった

文=南部広美(フリーアナウンサー)

振付・演出：伊藤郁女
出演：Aokid、Noémie Ettlin、
Yu Okamoto(岡本優)、Issue Park、
Rinnosuke(リンノスケ)、Sato Yamada(山田暁)、
Ema Yuasa(湯浅永麻)、Léonore Zurflüh



撮影=大洞博靖

KAAT⇄TJPで重ねられた試運転を経ていよいよ本発車。KAAT発ダンスマラソンエクスプレスに乗った。横浜⇄花巻 令和から明治までのタイムトラベル。降車後に元町に出たら、折から参院選真つ只中、立候補者が街頭演説を繰り広げていた。

1970年岩手花巻という場所で生まれ育った私にとって、宮沢賢治は物心つくなり大人から言いふくられる偉人で、いまだついてまわる存在。『詩人』とだけ聞かされ、ピンと来ずとも、夏休み横浜の伯母たちの家で過ごした小2の宿題は、掛け算九九と兩ニモ負ケズを暗記することだったと思い出す。

長年の疑問「賢治が何をした人だったのか」花巻弁という音の響きをまま文字にして書きつけた。明治～大正～昭和8年までに見た景色や匂い、体験思考感情を物理的世界に封じ込めることができた人なのだと。今ならスマホで動画保存もできようが。存命中、世に知られなかったことも、納得がいった。ありのまますぎた。それゆえ賢治のテキストは、時の政治に勝手な解釈を加えられ、便利に利用されながらも、意図は残る。東北の自然と生きる厳しさも。

鹿踊りだ。と直感させたダンサー8人は多様なルーツで、彼らに染み込んだ意志と理解が猛スピードで飛び込んできた。ものすごい解像度で。言葉になる前の感覚や思考、概念体系自体を、身体表現に翻訳する技術が“ダンス”で、オノマトペは言葉のダンス変換なのではないかと感じた。

賢治製『ひかりの素足カプセル』に、伊藤郁女さん8人のダンサーさん長塚圭史さん製作者の皆さんが思考という水を注ぎ、むくむくと戻し、タイムスタンプを刻み、音楽とダンスカルチャーの変遷という注釈つきで、2025年へとつながる線路を特急列車は走る。予期せず長年の宿題だった賢治との和解が始まった。

南部広美 Hiromi Nanbu

1970年岩手県花巻市出身。フリーランスアナウンサー。TBSラジオ 平日17:00～20:00の生放送『荻上チキ・Session』担当

第12回

神奈川へ、会いに 〈ライフデザインラボ 船本由佳さん〉

長塚芸術監督が、今、気になっている街の人にふらりと会いに出かけます。第12回は、「ライフデザインラボ」所長の船本由佳さんに会いにKosha33へ。そこには、神奈川県住宅供給公社(以下、神奈川県公社)の鈴木伸一郎さんと、テレビ神奈川(以下、tvk)プロデューサー門馬遥香さんの姿もありました。この3人のつながりとは？

写真=石渡朋

長塚 Kosha33がある公社ビルには以前、KAATのスタジオがあって僕も何度か足を運んだことがあるんです。「ライフデザインラボ」はこちらで活動を？

船本 はい。現在の拠点は関内校通りにありますが、2018年から5年間ここで活動しており、現在もKosha33でイベントを開催しています。

長塚 どんなきっかけで「ライフデザインラボ」を始められたんですか？

船本 私は以前、KAATの隣にあるNHK横浜放送局でキャスターをしていました。12年ほど前に出産を経験し、仕事を離れた時、社会から切り離されたような孤独感を覚えたんです。そんな時、地区センターで出会ったママ友と「まま力の会」を結成し、神奈川県公社さんに応援をいただいて「ライフデザインラボ」を立ち上げました。いまここは本屋さんやパン屋さんもある、多様な人が訪れる“街の交差点”のような場所です。子育て世代に限らず、いろいろな人と出会い、社会の課題にも触れられる場になっています。

長塚 船本さん、鈴木さん、門馬さんのつながりとは？

船本 私たち「ライフデザインラボ」と神奈川県公社は、tvkが主催する「はじめてばこ」と連携して、主に0歳児のいるママパパを対象とした手形足形アート体験や、ママパパの交流会などを企画・運営しています。

長塚 「はじめてばこ」って何ですか？

門馬 tvk、生活協同組合パルシステムと神奈川県がコラボレーションして、生後1年までのお子さまに「神奈川に生まれてきてくれてありがとう」の気持ちを込めて、オリジナルボックスを贈るという取り組みです。2020年1月にスタートしました。



左から、神奈川県住宅供給公社 鈴木伸一郎さん、テレビ神奈川 門馬遥香さん、ライフデザインラボ 船本由佳さん、長塚芸術監督

長塚 ボックスのデザインもいいですね。

門馬 神奈川の海や名所が描かれているんですよ。箱のなかには、協賛企業各社からのクレヨンやサプリなどの商品やtvkオリジナルブランケット、童謡カードなどが入っています。使い終わったら、ファーストシューズなどの大切なものをとっておく宝箱にすることもできます。うれしいことに、今年の7月にはお申し込みが10万人を達成しました。

鈴木 「はじめてばこ」には神奈川県公社も参加していて、県内で作られている「キットパス」という画材を提供しています。そのほかにも何か子育て応援ができないかと、「ライフデザインラボ」と一緒にさまざまなイベントを開催しているんです。イベントはKosha33のほか、tvk本社や会社の団地でも開催しています。

門馬 tvk会場の時は「キットパス」の手形足形アート体験やスタジオ見学を楽しんでもらっています。

長塚 子育て中の方々がうれしくなるようなイベントですね。

船本 企画・運営は「ライフデザインラボ」が担当しています。スタッフは子育て当事者であり、子育ての経験をもとにアイデアを出しています。

長塚 船本さんご自身の経験から、企画をしているんですね。

船本 私自身、子育てを経験してコミュニティの大切さを実感しました。苦しい時に手を差し伸べてくれる、人とのつながりがあるまちづくりの大切さにも気がついたんです。自分も街の一員だと感じながら、子育てすることが理想です。じつは今、神奈川県公社の団地共生プロデューサーでもあるんですよ。

長塚 KAATのアトリウムも同じように、“街の交差点”を目指しています。キッズ・プログラムでは親子で観劇できる環境づくりを進めています。僕が主宰している劇団でも、以前は子育て中のメンバーが子どもを稽古に連れてくることがありました。にぎやかでしたが(笑)、生活と演劇の近さを感じることができていたように思います。その頃の子どもたちも今は大きくなってしまい、少し寂しいくらいですよ。

船本由佳(ふなもと・ゆか)

阪神・淡路大震災を機にマスコミへの就職を志望し、大学卒業後、NHKで勤務。ニュースキャスター、フィールドリポーター、生中継、旅番組リポーター、ジャズ番組バーソナリティーなどを担当し、2008年にNHK横浜放送局への転勤を機に横浜へ。その後、2012年に出産。「子連れも子どもも社会参画できるか」をテーマに各地で子連れフィールドワークを開始。違いを認め合いつながることで安心できる地域の暮らしの実現を目指し、2018年ライフデザインラボを発足。以来、発信と場づくりをテーマにコミュニティづくりの支援をしている。旅とアートが好き。神奈川県住宅供給公社の団地共生プロデューサーの一人としても活動中。



はじめてばこ

<https://www.tvk-yokohama.com/mirai/hajimetebako/>

神奈川県住宅供給公社

<https://www.kanagawa-jk.or.jp/>

主催公演

KAAT神奈川芸術劇場プロデュース
『最後のドン・キホーテ
THE LAST REMAKE of Don Quixote』
9月14日(日)ー10月4日(土) ホール

作・演出:ケラリノ・サンドロヴィッチ
出演:大倉孝二、
咲妃みゆ、山西惇、音尾琢真、矢崎広、須賀健太、
清水葉月、土屋佑壱、武谷公雄、浅野千鶴、王下貴司、遠山悠介、
安井順平、菅原永二、犬山イヌコ、緒川たまき、高橋恵子
演奏:鈴木光介、向島ゆり子、伏見瑩／細井徳太郎、関根真理、関島岳郎
チケット好評発売中

あの名作のリメイク決定版!?KERAが新たに読みかえる「ドン・キホーテ」を、個性と実力を兼ね備えた俳優陣で上演!

KAAT EXHIBITION 2025
『大小島真木展 |
あなたの胞衣(えな)はどこに埋まっていますか?』
9月21日(日)ー10月19日(日) 中スタジオ・アトリウム

作家:大小島真木
音楽:カーティス・タム
チケットは3階中スタジオにて受付(会期中のみ)

「祈り」―それは、「私たちの死」をあらかじめ荘厳すること、
そこに小さな明かりをいっせいに灯すこと―
美術作家 大小島真木による新作インスタレーション

KAAT DANCE SERIES
『CARCAÇA(カルカサ)』
10月24日(金)ー10月25日(土) ホール

振付・演出:マルコ・ダ・シルヴァ・フェレイラ
音楽:ジョアン・バイシュ・フィリップ、ルイシュ・ピシュタナ
出演:マルク・オリヴェラシュ・カーサシュ、マルコ・ダ・シルヴァ・フェレイラ、
ナラ・レヴロン、アンドレ・スビーディ、ファビオ・クレイズ、
マリア・アントーヌシュ、マックス・マカウスキ、メラニー・フェレイラ、
ネルソン・テウニシュ、エリック・アモリム・ドス・サントス
チケット好評発売中

多彩なステップと力強い歌声で、ポルトガルの歴史とアイデンティティを鮮やかに描き出す。グルーヴ感あふれるダイナミックなダンスが、現在と未来の世界を躍動的に浮かび上がらせる―考え抜かれた構成と情熱が融合した、心を揺さぶるフィジカルシアターの傑作。

KAAT×城山羊の会
『勝手に唾が出てくる甘さ』
11月14日(金)ー11月30日(日) 中スタジオ

作・演出:山内ケンジ
出演:松本まりか、じろう(シソンス)、岩谷健司、
中山求一郎、湯川ひな、三木万侑加、岡部たかし
チケット好評発売中

作・演出の山内ケンジ氏が第74回読売文学賞戯曲・シナリオ賞を受賞した『温暖化の秋-hot autumn-』から3年。熱烈なりくエストに応え、再びKAATと城山羊の会が新作上演!淡々とした会話の中に生々しい感情が見え隠れする独自の世界観を、松本まりか、じろう(シソンス)をはじめとする魅力あふれる出演者が描き出す。

チケット取扱い・お問い合わせ)チケットかながわ 0570015415 (10時〜18時/年末年始を除く)

KAAT 公演スケジュール 2025 AUTUMN		
9月12日 金ー9月14日 日	松本梨香40周年記念特別公演『ナビゲーション』	大スタジオ
9月14日 日ー10月4日 土	KAAT神奈川芸術劇場プロデュース『最後のドン・キホーテ THE LAST REMAKE of Don Quixote』	ホール
9月20日 土ー9月23日 火・祝	オペラシアターこんにゃく座公演 オペラ『変身』	大スタジオ
9月21日 日ー10月19日 日	KAAT EXHIBITION 2025『大小島真木展 あなたの胞衣(えな)はどこに埋まっていますか?』	中スタジオ・アトリウム
9月27日 土ー9月28日 日	第24回神奈川県民ミュージカル『ザッツ・エンターテインメント』	大スタジオ
10月5日 日ー10月13日 月・祝	オーストラ・マコンドー『ちゃんと死にふれる』	大スタジオ
10月14日 火ー10月19日 日	空気階段 第8回単独公演『ダンス』	ホール
10月18日 土ー10月26日 日	CCCreation『近松心中物語』	大スタジオ
10月24日 金ー10月25日 土	KAAT DANCE SERIES『CARCAÇA(カルカサ)』	ホール
10月30日 木ー11月9日 日	シアター・コントロニカ コント公演『イミノウム』	大スタジオ
11月1日 土ー11月2日 日	2025 アートダンスカナガワNo.13『Romeo and Juliet』	ホール
11月2日 日	KAAT×国立劇場くつたえつなぐ>『観てよみ解く〜実演&レクチャー〜』文楽 三味線編	中スタジオ
11月3日 月・祝	劇団四季ファミリーミュージカル『カモメに飛ぶことを教えた猫』	ホール
11月12日 水ー11月16日 日	まつもと市民芸術館プロデュース『チェーホフを待ちながら』	大スタジオ
11月14日 金ー11月30日 日	KAAT×城山羊の会『勝手に唾が出てくる甘さ』	中スタジオ
11月15日 土ー11月16日 日	KAATマルシェ	アトリウム
11月15日 土ー11月16日 日	『メタファー:リファンタジオリーディングライブステージ』	ホール
11月21日 金ー11月22日 土	『ネザーランド・ダンス・シアター(NDT 2)来日公演2025』	ホール
11月23日 日・祝ー11月24日 月・休	『Sayaka Yamamoto Hall Tour 2025-26 "home away from home"』	ホール
11月28日 金ー12月14日 日	横浜国際舞台芸術ミーティング2025(YPAM2025)	ホールほか
11月29日 土ー11月30日 日	『大誘拐』〜四人で大スペクタクル〜	ホール
12月5日 金ー12月7日 日	瀬戸内サーカスファクトリー(SCF)現代サーカス「DADDA2025横浜版」	大スタジオ
12月19日 金ー12月28日 日	ゆうめい10周年全国ツアー公演『養生』	大スタジオ
12月21日 日	『プリンセッション・オーケストラ 2nd EVENT』	ホール
毎月開催 (日程は決定次第発表します)	KAATフレンドシッププログラム『みんなのKAAT バックステージツアー』	ホール

※情報は2025年9月1日現在のものです。変更となる場合がございます。予めご了承ください。詳細は、各公演のウェブサイトをご確認ください。

KAAT 神奈川芸術劇場

〒231-0023 神奈川県横浜市中区山下町281
TEL.045-633-6500(代表) FAX.045-681-1691
https://www.kaat.jp

- みなとみらい線:渋谷駅から東横線直通で35分!横浜駅から6分!
日本大通り駅から徒歩約5分。元町・中華街駅から徒歩約8分。
- JR根岸線:関内駅または石川町駅から徒歩14分。
- 市営地下鉄:関内駅から徒歩14分。
- 市営バス:芸術劇場・NHK前すぐ。
横浜駅前東口バスターミナル 2番のりば乗車(所要時間約25分)
桜木町駅前バスターミナル 2番のりば乗車(所要時間約10分)
※上記のりばから発車するバスはすべて「芸術劇場・NHK前」を通ります。
- 神奈川芸術劇場有料駐車場(65台)もご利用ください。

指定管理者:(公財)神奈川芸術文化財団

YouTube

@kaatjpchannel

公式X

@kaatjp

Facebook

@kaatkanagawa

Instagram

@kaatkanagawa

KAAT PAPER 読者アンケート

今後の誌面づくりに活かすため、皆さまのご意見・ご感想をぜひお寄せください。アンケートにご回答いただいた方の中から抽選で5名様に、KAATオリジナルグッズをプレゼントします。※プレゼントの応募期限:2025年11月30日(日) ※厳正なる抽選のうえ、当選者の発表はメールでのご連絡をもって代えさせていただきます。

KAAT EXHIBITION 2025
『大小島真木展 |
あなたの胞衣(えな)はどこに埋まっていますか?』
9月21日(日)ー10月19日(日) 中スタジオ・アトリウム

作家:大小島真木
音楽:カーティス・タム
チケットは3階中スタジオにて受付(会期中のみ)

「祈り」―それは、「私たちの死」をあらかじめ荘厳すること、
そこに小さな明かりをいっせいに灯すこと―
美術作家 大小島真木による新作インスタレーション

KAAT×城山羊の会
『勝手に唾が出てくる甘さ』
11月14日(金)ー11月30日(日) 中スタジオ

作・演出:山内ケンジ
出演:松本まりか、じろう(シソンス)、岩谷健司、
中山求一郎、湯川ひな、三木万侑加、岡部たかし
チケット好評発売中

作・演出の山内ケンジ氏が第74回読売文学賞戯曲・シナリオ賞を受賞した『温暖化の秋-hot autumn-』から3年。熱烈なりくエストに応え、再びKAATと城山羊の会が新作上演!淡々とした会話の中に生々しい感情が見え隠れする独自の世界観を、松本まりか、じろう(シソンス)をはじめとする魅力あふれる出演者が描き出す。

チケット取扱い・お問い合わせ)チケットかながわ 0570015415 (10時〜18時/年末年始を除く)

KAATな人の行まっけ

《第11回》

Rü cafe

KAATの周辺は、食事や買い物、観光スポットが豊富な魅力的なエリア。
そこで出演者や展示アーティスト、スタッフが足しげく通う、
この街の“行きつけ”をご紹介します。

昔ながらのオムライス(平日ランチ/スープ・ミニサラダつき)1,000円
(休日限定ランチ/スープ・ミニサラダ・ドリンクつき)1,500円
クリームソーダ(休日限定ランチ)ランチ価格+300円(すべて税込)

横浜・大さん橋のふもと、1929年竣工の横浜貿易会館地下にある「Rü cafe(ルーカフェ)」は、2020年1月にオープンした、落ち着いた雰囲気のカフェです。店名の由来は、前職で飲食店のマネージャーをつとめていたRさんと美術大学出身のüさん、オーナー二人のイニシャルから。メニューは、横浜で生まれたナポリタンやシーフードドリアをはじめ、オムライスなどの洋食やパスタ、ガトーショコラなどのデザートも。人気のクリームソーダには、この店のオリジナルキャラクターである宇宙人「ルーちゃん」のクッキーが添えられています。頭のてっぺんに「R」がついている可愛いキャラクターは、お店の看板や店内のいろんなところに登場しています。横浜でのランチタイムや、観劇前のひとときにぜひ立ち寄りたいお店です。

Rü cafe(ルーカフェ)
〒231-0002
神奈川県横浜市中区海岸通1-1
横浜貿易協会ビルB1
☎045-211-4334

〈営業時間・定休日〉
毎月Instagramで告知。緊急時や悪天候などで急な変更の可能性がありますので、お出かけ前にInstagramでご確認ください。
〈instagram〉@ru_cafe

表紙について

2021年に劇場監督として長塚圭史さんが就任して始まった「ぼう」シリーズは、今年で5年目を迎えます。表紙には、アートディレクター吉岡秀典さんが手がけたロゴをもとに、立体的にかたちを広げたデザインを採用しました。劇場の外壁の色合いとも響き合うように仕上げ、KAATという場の空気を感じられるようにしています。さらに「目」のモチーフを加えることで、劇場が時代を見つめ、世論を映し、未来へ視線を向ける存在であることを、さりげなく表現しました。

季刊誌 神奈川芸術劇場 KAAT PAPER 秋号(年3回発行) 2025年9月8日発行 発行=KAAT神奈川芸術劇場 編集=伊藤総研株式会社、松田美保 編集協力=株式会社ホイズ クリエイティブデザイン=高田雅(Ailright) フォトデザイン=高田雅(Ailright) デザイン=高田雅(Ailright) イラスト=高田雅(Ailright) 表紙デザイン=高田雅(Ailright)